

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

島 嶼 研 だ よ り

No.61

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2011年3月

 主な記事

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター設置記念式典・シンポジウム開催	p1
学生奮闘記「離島がくれるもの」(鈴木智博)	p2
平成22年度ミクロネシア連邦ポンペイ州における調査報告	p3
島嶼学教育コース「島嶼学概論II」開講	p9
フィールドこぼれ話「キーワードはドロドロ」(河合 溪)	p10
連載 とうがらしに旅して「ししとうのあたり」(山本宗立)	p12

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 設置記念式典・シンポジウム開催

国際島嶼教育研究センター長 野田伸一

2010年10月2日、鹿児島大学主催、鹿児島県後援により「国際島嶼教育研究センター設置記念式典・シンポジウム」が鹿児島大学で開催されました。

日本列島南部の600kmに及ぶ南北連続島嶼域である「鹿児島列島」は、亜熱帯・温帯の連続島嶼域であり、地球環境・地球社会変動のグローバルなセンサーゾーンでもあります。鹿児島大学はこの島嶼の特色を生かし、島嶼の研究機関として、1981年から南方海域研究センター、1988年から南太平洋海域研究センター、そして1998年に多島圏研究センターを設置し、島嶼研究の国際的拠点として活躍をしてきました。2010年4月に、その成果と特色を一層発展させるために、地域的かつ世界的視点をもつ教育研究機関として、多島圏研究センターを前身とする国際島嶼教育研究センターを設置しました。この設置を記念し、記念式典(第一部)とシン

ポジウム(第二部)が開催されました。

第一部では国際島嶼教育研究センターの紹介と、2010年10月から新設された全学横断的な大学院博士前期課程教育コース「島嶼学教育コース」についての紹介がなされました。

第二部では「ネシア・エンパワメントー島の未来可能性をパワーアップするー」と題し、島嶼の抱える「未来可能性」について議論がなされました。「島の未来可能性」とは、島の未来には多様な「疑問符」がつきつけられていることを示す言葉です。この用語は、現在の地球環境問題を考慮したとき、島嶼における物質文明的発展がそのまま継続できるのか、という疑問として国際会議で提示された公式用語「持続可能性」に倣っています。特別講演ではミクロネシア連邦駐日公使アンドリュウ P. レンスター閣下を招き、鹿児島大学(当センター)とミクロネシアとの関係史、国家経営に関わる多様で

具体的な内容と、日本（鹿児島）との交流に関わる認識について御講演いただきました。その後、ポリネシア、奄美、ミクロネシア、国内島嶼を専門とする4名の方に各専門領域から御報告していただき、「島の未来可能性」について議論がなされました。

本シンポジウムは、FSM 駐日大使館・鹿児島県・三島村・十島村・垂水市漁協・奄美広域事業組合・黎明館・奄美の里・太平洋諸島センター・笹川太平洋島嶼国基金そして本学教職員等に多大なご尽力をいただき実現しました。皆様に心から感謝の意を表します。

学生奮闘記

離島がくれるもの

鈴木智博（鹿児島大学大学院水産学研究所）

みなさんは「離島」と聞くとどのようなイメージが膨らむだろうか。ヤシの木が立ち並ぶ海岸線、太陽がさんさんと照りつける白い砂浜のビーチなどが浮かぶだろう。しかし、私の中にある「離島」のイメージはそれとは全く違うものである。私の中の「離島」のイメージとは、ずばり「出会い」である。

初めて離島に触れたのは部活動だった。私が所属していた海洋生態研究会というダイビング部では、春季と夏季の休暇に奄美と沖縄の離島で長期合宿を行っている。合宿の第一の目的は、ダイビングを用いて観察を行い、海洋生物の知識を広げることだ。しかし、私は合宿にはもう一つ大きな目的があると考えている。それは、島の方々との出会いだ。離島という特殊な環境と、私たちのような普通の大学生が触れ合う機会はほとんど無い。離島には、独特の文化や生活習慣がある。私が訪問した離島では、生活物資は定期船による供給に依存し、物品の販売はコンビニやスーパーではなく小さな商店で行われていた。離島の生活は、決して便利だとは言えない。しかし、島の方々の生活は笑顔であふれていた。「これ食べて元気だし」と差し入れをしてくれるおばあ。自分の若い頃の武勇伝を語ってくれるおじい。高校に通うため島を離れた子と両親の海を越える強い絆。甲子園があれば島中から集まり、みんなで応援する光景から伝わる地元愛。離島の人たちとの出会いによって、人の心は温かくとても豊かなものだと感じた。また、研究室に所属した後も離島と関わる機会はあった。鹿児島県本土のすぐ南にある離島として知られる三島村で、卒業研究として海藻植生調査を行った。竹島、硫黄島、黒島からなる三島村は本土からの距離にして40kmほどにも関わらず、そこに広がる景色は全く違うものだった。島内に甲高く響き渡る孔雀の鳴き声。硫黄を噴出し、海を黄緑色に染める活火山。断崖から悠然と流れ落ちる無数の滝。島全体を鬱蒼と覆い尽くす竹林。海中に広がる、珍しい海藻たち。離島が育む自然は私を圧倒し、大きな感動を与えてくれた。

人との出会いだけではなく、生物さらには自然との出会いも与えてくれる場所。それが、私の考える「離島」である。みなさんも素敵な出会いを探しに、離島に出かけてみてはどうだろうか。

平成 22 年度ミクロネシア連邦ポンペイ州における調査報告

国際島嶼教育研究センターでは「島はひとつの世界」という概念のもと、「多島域における環境変動に対する適応」および「小島嶼の自律性」の2つのプロジェクトを軸に、国内外の島嶼部で研究調査をおこなっています。平成 22 年 8 月 5 日から 9 月 8 日にかけて、ミクロネシア連邦ポンペイ州（ポンペイ島、モキール環礁、ピングラップ環礁）において「ミクロネシア地域における自然・社会環境と人々の生活に関する調査」をおこないました。調査には島嶼研専任教員 4 名と兼務教員 3 名が参加しました。調査概要について報告いたします。



参加者（ポンペイ島の空港にて）

1) 蚊の発生源対策

野田伸一
（国際島嶼教育研究センター）

ミクロネシア連邦ポンペイ州の離島であるピングラップ環礁とモキール環礁で 3 年前（2007 年）に生活調査を実施したが、居住地域内が清潔に保たれ生活ごみが適切に処理されていたことが非常に印象深かった。人家周辺に放置されたプラスチックの容器や空き缶は蚊の絶好の発生源となり、デング熱・マラリア・フィラリアなどの蚊が媒介する感染症の流行

につながる。蚊が媒介する病気を防ぐためには蚊の駆除が必要であるが、理想的な方策は一般住民も参加して蚊の発生源を居住地域から除去することである。2010 年 8 月に、蚊の分布調査とコミュニティの状況の把握を目的として再調査を実施した。3 年前に訪れたときにはピングラップ環礁とモキール環礁では衛生的な環境が保たれていた。しかし、今回の調査で、モキール環礁では蚊の発生につながる生活ごみが目立ち、衛生状態の悪化が認められた。モキール環礁では住民のポンペイ本島への流出が進み、人口減少に伴うコミュニティの弱体化が顕著であった。これに対してピングラップ環礁では伝統的な生活が維持され、島外から持ち込まれる生活物資の消費が少なく、プラスチックや空き缶のゴミも少なかった。また、生活に伴って発生したゴミは地面に掘った穴に集められ、適切に処理されていた。



ピングラップ環礁で見られたゴミ処理風景

2) 島未来可能性の MIRAB 構造への疑問と光明

長嶋俊介
（国際島嶼教育研究センター）

ピングラップは遠隔小離島といえども貨幣

経済・消費経済が柱で、生存経済は部分的には健全でありながらも補足的である。移出産物がないのに、全戸公務が割り当てられ（社会システムがそれで成り立ち）、その収入（米国資金）と出稼ぎ先送金により、消費経済が維持されている（これを MIRAB 構造という）。島の未来はその線上にはない。この 1-2 年の間に家庭菜園（野菜）が全戸の 2/3 で本格的に始まり、鹿大卒業生関与の真珠養殖が始まっていた。野焼き問題（指導者・取締り当局に危害知識無い）等健康知識・普及課題があり、未来世代の内発的島内起業化（島内資源開発）に無策である点が島未来の懸念材料である。エンパワメント課題として有用資源の養殖・栽培の幅を増やすことと技術・ビジネス・組織形成教育を経た上での「民（あるいは新しい公共）の創造」が喫緊の課題である。



ピングラップの家庭菜園

3) ポナペ島周辺に産する有孔虫群集の解析とその教育への活用

八田明夫
(教育学部)

ミクロネシア連邦・ポナペ島に於いて現生有孔虫群集の採取を行った。採取地点は、ポナペ島北東部、北西部及び南東部のリーフ内の浅海域である。また、国際島嶼教育研究センターの長嶋教授採取のピングラップ環礁・Deke 島沿岸

のサンプルも調査対象とした。

採取したサンプルをミクロネシアカレッジ (COM) の実験室で、生物担当の教員の協力のもとに予察的な観察作業を行った。帰国後、堆積物から分離する作業後、有孔虫の鑑定を行っている。

採取した有孔虫を生物顕微鏡により撮影し、多焦点画像処理技術ソフト (Helicon Focus) で有孔虫の鮮明な画像を作成中である。

ミクロネシアの学校教育の現状について、JICA (国際協力機構) ミクロネシア支所企画調査員の飯田典子氏の協力で先生の数や児童数の公表されたデータを得た。ミクロネシアカレッジ (COM) の協力で、ミクロネシア連邦の教員養成プログラムについても最新の情報を得た。後日、有孔虫の研究を行い、ミクロネシア連邦における教育・研究に資するような研究成果を得たいと考えている。

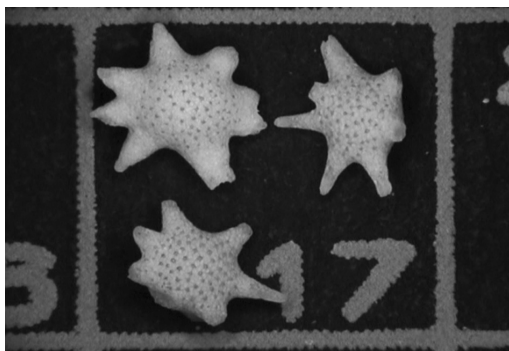


写真 ミクロネシア連邦・ピングラップ環礁・Deke 島から採取した有孔虫 (長嶋先生採取、1 枠の大きさ縦横共に 3.5mm、*Baculogypsina sphaerulata* (Parker and Jones)、Helicon Focus で画像処理)

4) ポンペイ島における地質学的調査

仲谷英夫
(理工学研究科 (理学系))

西太平洋ミクロネシア連邦のポンペイ島は、カロリン諸島の東部に位置し、チュルク島、コ

スラエ島と同様に、化学的組成からみてアルカリ岩からなる平均高度 600~700m の火山島で、その周りをサンゴ礁とラグーンに囲まれた堡礁である。同じ西太平洋でも西部のカルクアルカリ岩からなるマリアナ諸島やパラオ島とはその構成する岩石や火山活動の様式が異なっている。ポンペイ島は近隣のバキム、アント両環礁を含む巨大な盾状火山の一部であり、その火山活動のはじまりは 900 万年前にさかのぼる。その後、何回かの火山活動や地殻変動や浸食を経て現在のポンペイ島の地形ができあがった。今回の調査では、ポンペイ島の代表的な火山岩や、それらに含まれるさらに深いところに存在する岩石である捕獲岩を採集し、その分布を記録した。さらに、ポンペイ島北部のパレム島などに分布する火山の崩壊に伴って堆積した土石流堆積物も調査した。現在、これらの岩石の記載岩石学的、地球化学的研究を進め、ポンペイ島の成り立ちを明らかにする予定である。また、ナンマドール (Nan Madol) 遺跡からあまり離れていない滝の周辺の転石に、この遺跡の石材とよく似たものがあり、石材の供給源についても考察を進めている。



Kepirohi 滝

(滝は捕獲岩を含む無斑晶の火山岩からなる。周辺にはナンマドール遺跡の石材と似た大きな斑晶を含む火山岩の転石が見られる)

5) ポンペイ島の海産植物

寺田竜太
(水産学部)

ポンペイ島北部および東部の計 15 ヶ所において、海産植物の植生調査をおこなった。調査は、離岸距離と水深、時刻を記録した上で底質と各種の被度を記録した。島の周辺には広大なサンゴ礁リーフ内が形成されており、水深 1-3m の浅所にはウミシヨウブ *Enhalus acoroides* やリュウキュウスガモ *Thalassia hemprichii*、ベニアマモ *Cymodocea rotundata* の海産顕花植物群落 (アマモ場) が各地で見られた。アマモ場内には海藻類も混生し、ヒロハサボテングサ *Halimeda macroloba* やセンナリズタ *Caulerpa racemosa* f. *macrophyssa*、フシクレノリ *Gracilaria salicornia* などが多く見られた。褐藻ホンダワラ科藻類のガラモ場は島の北部に見られ、岸よりの場所にはコバモク *Sargassum polycystum* の群落のアマモ場とモザイク状に点在した。一方、トサカモク *Sargassum cristaefolium* やラツパモク *Turbinaria ornata*、カサモク *Turbinaria conoides* の群落はリーフ末端の岩盤状に多く見られた。調査の結果、緑藻 15 種、褐藻 12 種、紅藻 12 種、海産顕花植物 3 種の計 42 種の生育を確認した。

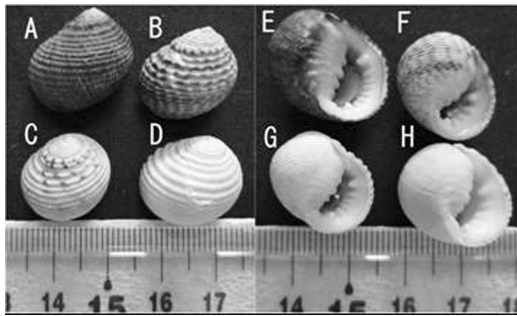


海藻類とウミシヨウブの混生群落

6) ミクロネシア連邦ポンペイ州に生息する巻き貝の殻色変異

河合 溪
(国際島嶼教育研究センター)

沿岸域の岩礁域は温度変化が激しいが、多くの生物がその環境に適応し生息をしている。キバアマガイ *Nerita plicata* は岩礁域に生息する巻き貝で、殻色に多様性があることが知られている。キバアマガイと生息する基質の色との関係を解明するため、ミクロネシア連邦ポンペイ州のポンペイ本島とその近く島において 2010 年 8 月に野外観察を行った。ポンペイで観察されたキバアマガイには 3 つの殻色（白色、一部縞模様、全部縞模様）のタイプが観察された。一般に沿岸域では基質の色は様々であるが、殻の色は白色個体が多くを占めていた。一方、本島の近くの小島にある場所では全域で黒色の岩が観察され、そのキバアマガイの殻色は一部縞模様、全部縞模様がほとんどで、白色の貝殻個体はほとんど観察されなかった。キバアマガイは浮遊幼生期を持つと考えられるため、狭い地域では遺伝的に同じと考えられる。従って、今回観察されたポンペイ本島における殻色の違いは、何らかの選択圧が稚貝期に影響しこの様な殻色の変異を引き起こした可能性が考えられる。



一般的なキバアマガイの殻色変異: A,E; 黒色、B,F; 全部模様、C,G; 一部模様、D,H; 白色

7) ポンペイ州におけるキダチトウガラシの利用

山本宗立
(国際島嶼教育研究センター)

キダチトウガラシ (*Capsicum frutescens* L.) は中南米原産で、現在では熱帯・亜熱帯の幅広い地域に分布している。ポンペイ州では 3 種類のキダチトウガラシが利用されていた。果実が一番小型で未熟果が緑色のキダチトウガラシは古くから利用されているようであったが、残りの 2 種類は第二次世界大戦前後に導入された可能性がある。キダチトウガラシはあちこちに野生化しており、人びとはキダチトウガラシを栽培すべき植物と認識せず、野生化個体を利用していった。果実は生で利用されるほか、塩蔵果実や果実をさまざまな液体（熟したココヤシの果水、水、柑橘の果汁、市販の酢）に漬けた調味料として利用されていた。葉は野菜としてスープや炒め物に利用されていた。特に小さな環礁であるモキールおよびピングラップにおいては非常に重要な葉菜であった。葉用としては、果実が駆虫剤、関節痛に利用されるほか、新芽（蕾を含む）が傷口の止血に、花が出産の促進に利用されていた。キダチトウガラシは、①上記地域の環境に適応して野生化しており、それほど手をかけなくていい、②1 年を通して果実・葉を採集できる、という利点があり、ポンペイ州において再評価されるべき半栽培植物であると思われる。



キダチトウガラシの葉が入ったスープ

「ミクロネシア地域における社会変化－自然・社会環境と人々の生活」
(平成 22 年度総合地球環境学研究所インキュベーション研究)

国際島嶼教育研究センターは、総合地球環境学研究所が公募した「インキュベーション研究 (IS)」を平成 22 年度獲得いたしました(「ミクロネシア地域における社会変化－自然・社会環境と人々の生活」代表者：野田伸一)。それをうけて、平成 23 年 1 月 18 日総合地球環境学研究所において「ミクロネシア地域における未来可能性－コミュニティのエンパワーメントに向けて」と題し、シンポジウムを開催いたしました。シンポジウムの趣旨は「ミクロネシア地域ではグローバリゼーションや気候変動の影響を受け、伝統的な社会の崩壊とともに自然・社会環境が悪化している。本地域の島嶼国は環海性・隔絶性・狭小性・分散性という地理的環境としての困難性を抱え、脆弱な経済からの脱却は容易なことではない。しかし、人々は先進諸国の政策に翻弄されながらも、誇りを持って生きてきており、その生活の多様性は尊

重されるべきである。ミクロネシア地域における自然・社会環境の変化がどのように個人の生活に影響しているかを明らかにし、この地域の生活改善に向けての方策を考えたい」にありました。まず野田センター長がシンポジウムの開会の辞および趣旨説明をおこなったあと、「公衆衛生上の諸問題：ミクロネシア連邦における Dengue 熱とその媒介蚊」(野田伸一・島嶼研)、「島嶼における人の生活と自然環境への環境変動の影響とその解析」(河合溪・島嶼研)、「最近 10 年間のヤップの社会変化について」(桑原季雄・鹿児島大学法文学部)、「援助終了後の経済自立に関する課題」(小林泉・大阪学院大学国際学部)の報告がありました。総合討論では秋道智彌氏(総合地球環境学研究所)および東裕氏(苫小牧駒澤大学国際文化学部)よりコメントをいただいたあと、島嶼研が目指す研究について活発な議論がおこなわれました。

国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 109 回 2010 年 11 月 8 日
かごしま丸ナポリ訪問 50 年前の映像記録
－鹿児島・ナポリ姉妹都市盟約 50 周年を祝して－

田口一夫
(鹿児島大学名誉教授)

昭和 35 年練習船「かごしま丸(第 2 代)」完工。その頃、鹿児島市はナポリ市と姉妹都市の盟約を結んだ。市はかごしま丸の処女航海の途次にナポリ市への寄港を大学に要請。同 11 月、かごしま丸は実習学生に加え市の親善使節団の一部団員も乗せて出港。スエズ運河を通り

ナポリまで直行。12 月ナポリ港埠頭に横付け。姉妹都市盟約を祝う行事には学生たちも参加し、街は KAGOSIMA 一色に染まった。彼らはナポリ商船大学他を訪問した。

当時の処女航海とは機器類を含め船体のテストを兼ねていたから、担当者はかなりストレスを受けるものであった。初代の老朽船から最新装備の船に移った乗組員にも戸惑があった。ましては練習船の性格上最新の機器を多数装備しただけにその心配が大きかった。スエズ運河の情報が皆無に等しかった。田口氏を除いて全員初の外国航路であった上、盟約式の日程は決まっていたので、航程の厳守が念頭にあった。

インド洋漁業実習では、セイロン島南方洋上でマグロ延縄漁業、そして鹿児島大学初のトロール漁業を行った。海洋観測・缶詰製造と学生は忙しいが、途中でコロomboに入港。漁場切り上げ後はシンガポール入港。2月16日、102日間の航海を終了して鹿児島港に投錨。この全てを16mmシネ・カメラで田口氏が撮影した。映像は、航海中の学生実習に焦点を当て、また各寄港地の風物も取り上げ、ナポリ市での盟約式行事も全て収録した。

第110回 2010年12月6日
海上帝国ヴェネツィアのクレタ島支配
— 島嶼支配の比較史への試み —

藤内哲也
(鹿児島大学法文学部)

地中海商業によって繁栄した北イタリアの都市国家ヴェネツィアは、中世以来アドリア海や東地中海の拠点となる港湾都市や島嶼部を支配下におさめ、海上帝国を築き上げていた。その多くは商業ルートに沿った中継地として利用されたが、ヴェネツィアの海外領土のなかでも最大の島嶼のひとつであるクレタ島では、ヴェネツィア本国から多数の入植者が移住し、広大な土地を所有して小麦やワインの生産を行った。ときに現地住民による大規模な抵抗に直面したものの、ヴェネツィアのクレタ統治は、近代以降のヨーロッパ諸国による植民地支配の先駆として意義づけられている。そこで本報告では、ヴェネツィアによるクレタ島支配のしくみや、カトリックの入植者とギリシア正教の現地住民、あるいは本国政府との関係などについて概観したうえで、その特徴を明らかにするとともに、近世薩摩藩による奄美支配の事例と比較することで、島嶼支配の比較史のための視座を得たい。

第111回 2011年1月24日
トカラ列島でのGPS観測

中尾 茂
(鹿児島大学理工学研究科)

国土地理院は1996年以降日本列島にGPS観測点を順次設置し、現在では1200点を超えるGEONET観測網を構築した。しかし、現在巨大地震の発生が想定されていないトカラ列島では、活動的な火山のある諏訪之瀬島に1点設置されているのみであった。この地域では、東にフィリピン海プレートが沈み込む琉球海溝があり、種子島・屋久島や奄美大島・喜界島のGEONET観測点の測定結果からプレート間の固着は弱いと考えられている。しかし、種子島・屋久島や奄美大島・喜界島地域でのプレート間固着を定量的に見積もった例は少なく、観測点がないため、トカラ列島地域では皆無である。そこで、まず、トカラ列島の地殻変動を明らかにし、さらにはプレート間固着の状態を見積もるために、トカラ列島において2007年からGPS連続観測を開始した。現在稼働している観測点は宝島、悪石島、臥蛇島に口之島である。ここでは、その概要を紹介し、2009年10月30日に発生したM6.8の地震の深さについて観測された地震時変動を使って議論する。

南西諸島北部領域における微小地震観測
八木原寛
(鹿児島大学理工学研究科)

島弧の1つである九州、及び南西諸島は、地震活動や火山活動が活発な領域に位置する。南西島弧地震火山観測所(NOEV)は、地震火山テクトニクスの詳細な研究を進展させ、地震災害の減災に貢献するために1991年に設置された。観測所は、地震観測システムを用い、主としてこの領域の地震活動についての研究を行ってきた。また、この領域の大部分は海域であるために、島弧に沿った領域に臨時に海底地震計を設置してきた。約20年にわたる連続観測

の結果、この領域の地震数は1年あたりに25,000を超えること、多数の小～中地震が、島弧に沿った複数の集中域で発生していることが分かった。

奄美大島周辺領域は、地震活動が最も高い領域である。本講演では、これまで行われた研究の中で、奄美大島周辺の地震観測研究に的を絞って紹介する。この領域の地震活動の特徴は次

のようにまとめられる。1) 顕著な地震活動が奄美大島南東付近の深さ28km付近に認められる。2) 深さ10kmよりも浅い地震は発生していない。この特徴は、陸域での地震活動の一般的な特徴とは大きく異なる。3) 沈み込むフィリピン海プレートの傾斜角は25°である。現在、我々はトカラ～奄美大島諸島の地震観測網を強化しているところである。

鹿児島大学大学院全学横断型教育プログラム「島嶼学教育コース」 コア科目「島嶼学概論Ⅱ」開講

近年の学問の学際化・融合化により、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力をもつ人材が社会で求められています。この要請に応えるため、鹿児島大学は大学院を横断して体系的に履修するプログラム「島嶼学教育コース」を昨年10月に創設しました。「島嶼学教育コース」の目的は、「南西諸島からアジア・太平洋島嶼域に関する様々な分野の授業科目を履修することにより、島嶼地域の要請に応え、国際島嶼社会でも活躍できる人材育成を目指す」にあります。

しかし、「島」へ行ったことがない、という学生も少なくありません。そこで、コースのコア科目である「島嶼学概論Ⅱ」では、学生により深く「島」を理解させるため、今年1月に講義の一部を十島村中之島でおこないました。「フェリーとしま」で島へ向かい、中之島の皆様から島の現状を御講義いただき、そして実際に現地を見てまわりました。「島」を体験する、そして「島」を考える機会を学生に与えております。



中之島における集合写真 (2011年1月23日)

～フィールドこぼれ話～

「キーワードはドロドロ」

河合 溪（国際島嶼教育研究センター）

この7年ほどフィジーで調査を行っている。フィジーと聞くと多くの人が「良いところで調査をしていますね」、と返ってくるのが常だ。フィジーのイメージは「白い砂浜、青い海、緑のヤシ、リゾート地」というところだろう。しかし、調査仲間ではフィジーと言えば「ドロドロ」というのが共通認識である。そこには3つのドロドロが存在する。まず、調査地の自然環境が「ドロドロ」なのだ。私たちは雨の多い沿岸域の村に滞在し、その地域の二枚貝の資源利用について生態学的視点と社会経済学的視点を融合させながら研究を行っている。二枚貝を調査するには村前のマングローブ林と干潟を泥にまみれて歩いて行き、砂泥を掘り起こさないといけない。ボートに乗って水質調査をすると、海水は常に茶色で海底を見ることはない。マングローブから出たデトリタスが海水に多量に含まれているためだ。調査前は真っ白なTシャツも、調査が終われば茶色なTシャツへと早変わり。毎日二色のシャツを着ているようなものだ。第二に、生活や儀式にとって重要な飲み物であるカバの色が茶色で、一見すると泥を飲んでいるかと感じるためだ。カバには独特の味があるのだが、覚醒作用があり、長く飲んでいると病みつきになる。第三に、フィジーにはフィジー系とインド系のフィジー人が住んでおり、権力闘争が絶えないため、社会的に不安定で、泥沼の様相を呈しているためである。私たちの調査において、学問的目的とは別に、この「ドロドロ」がいかに魅力的で重要なのかを解明するのが、本調査の隠れた目的かもしれない。



「カバを楽しむ家族」

最近の出版物

国際島嶼教育研究センターの出版物

(1) 南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.31, No2, 2011

Research Papers

Kei KAWAI, Sueo KUWAHARA, Ryuta TERADA, Shigeto TOMINAGA, Shinichi NODA, and Shunsuke NAGASHIMA: Influence of Environmental Changes on the Micronesian Region: Case Study of Islands in Yap State, Federated States of Micronesia

Notes

Cynthia N. ZAYAS: Describing Stewardship of the Common Sea among *Atob* Fishers of the Pacific Rim Islands - Cases from the Philippines, Taiwan and Japan

Sueo KUWAHARA: Development and Conservation Issues Relevant to the World Natural Heritage Listing of Amami

(2) 南太平洋海域調査研究報告 No.50 (2010年12月) (長嶋俊介・山本宗立編)

「鹿児島大学国際島嶼教育研究センター設置記念式典・シンポジウム」

第一部 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター設置記念式典

学長挨拶 吉田浩己 (鹿児島大学長)

来賓挨拶 アンドリュウ P. レンスター (ミクロネシア連邦駐日公使)

国際島嶼教育研究センター紹介 野田伸一 (国際島嶼教育研究センター長)

研究科横断型教育コース紹介 富永茂人 (学長補佐・島嶼プロジェクト担当)

第二部 シンポジウム

【ネシア・エンパワメントー島の未来可能性をパワーアップするー】

特別講演 「ミクロネシアと鹿児島 (日本) を結ぶーレインボーネシアを構想するー」

アンドリュウ P. レンスター (ミクロネシア連邦駐日公使)

報告1 「大洋州の国際協力の最前線からー鹿大 OB の経験ー」

浜田真一 (前 JICA ミクロネシア支所長)

報告2 「離島・群島課題と高等教育機関への期待」

東 美佐夫 (奄美市総務部企画調整課長)

報告3 「島嶼における教育と研究の困難と可能性啓蒙のジレンマー歴史からの教訓ー」

キャンベル イアン (国際島嶼教育研究センター)

報告4 「ネシア・エンパワメントー鹿児島・アジア太平洋島嶼域の未来可能性と教育・研究の大学貢献ー」 長嶋俊介 (国際島嶼教育研究センター)

『とうがらしに旅する』

第二回 「ししとうのあたり」

誰でも経験したことがあるだろう。あの殺人的な辛さを。ししとう（獅子唐）の煮浸しや天麩羅などを食べたときのいわゆる「あ・た・り」だ。辛い食材や料理を食べるときには、「食べるぞー」と身構えるからそれなりに我慢ができる。が、優しい顔をして急に牙を剥かれると度肝を抜かれる。まるで女性のような。どうして「稀に」辛い果実にあたるのだろうか？実はまだよくわかっていない。巷では、辛い品種の花粉がししとうの花につくから果実が辛くなる、などという人もいる。簡単な実験で科学的に証明できそうだが、寡聞にしてそのような報告を知らない。トウガラシ類は高温や強光、水不足などのストレスを受けると、果実がより辛くなるということが知られている。ししとうの場合、同じ植物体から採った果実でも辛い場合とそうでない場合があるから話がややこしい。現在この内容を研究している京都大学大学院農学研究科の松原幸子さんによると、少なくとも「種子が少ない果実は辛い」といえるようだ。今後の研究が期待される。とにかく、ししとうが辛さを発現する遺伝子を持っていることは間違いない。今後品種改良によって、どのような環境で栽培しても果実が辛くないししとうを作り出すことも可能だろう。でも、そんなししとうってちょっと魅力に欠けると思いませんか？だって、辛い果実にあたって大騒ぎをしていると、食卓が賑わってとても楽しいから。（山本宗立）

編集後記

いつの間にか一年が過ぎようとしています。これまでは東南アジア大陸部における調査が多かったのですが、島嶼研にきてからは、黒島、ミクロネシア連邦、与論島、中之島、フィジー、インドネシア、ハワイと島づくし。知人にはうらやましがられますが、これはこれで結構大変なんですよ、と弁解しつつ、島の調査・研究はとても楽しいです。また、当センターの島嶼部における教育・研究が、多くの皆様方のご協力により成り立っていることを実感した一年でもありました。皆様今後ともどうぞよろしく願いいたします。（山本宗立）



タコノキ科植物 (*kupar*) の果実をしがむ少女 (モキール島)

島嶼研だより No. 61 平成 23 年 3 月 10 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>